

自己開示と開示者の向性・神経症的傾向の関係

滝 野 匡 悦
倉 盛 一 郎*
米 澤 富士雄**

* 神戸市外国語大学

**大阪経済法科大学

Summary

Relationship between Self-disclosure and Self-discloser's Extraversion-Introversion and Neuroticism

Masayoshi Takino

Ichiro Kuramori

(Kobe City University of Foreign Studies)

Fujio Yonezawa

(Osaka University of Economics and Law)

The purpose of this study is to investigate and clarify a relation between self-disclosure and the extraversion-introversion and neuroticism of those who disclose themselves. We measured the relation in an experiment where 180 university undergraduate students participated as subjects.

The subjects were divided into four groups: EN (extraversion high-neuroticism); En (extraversion low-neuroticism); eN (introversion high-neuroticism); en (introversion low-neuroticism), according to the results of the Maudsley Personality Inventory (MPI). Between these four groups a comparison was then made in terms of scores of self-disclosure. The following results are obtained:

1. Extraversion personality functions as a factor promoting self-disclosure, while neuroticism functions as one suppressing it.

2. The relation $En > EN \approx en > eN$ was found with scores of self-disclosure of each group.

In addition, the comparison of the scores between disclosure-areas shows that a superficial theme such as "interest" is easy to disclose and an aspect deeply involved with the individual's latent tendency like "attitude" is hard to disclose.

問 題

自己開示 (self-disclosure) とは、自分に関する情報を、言語を媒体として、積極的に他者に伝達する行為である。この用語を最初に用いた Jourard & Lasakow (1958) は、自己開示とは相手にわかるように自分自身をあらわにする行為であるとし、だれに何をどの程度伝えるかには個人差があり、それはその個人の精神的健全さと深く関係しているとして、この概念をまず臨床的場面に導入した。

また Jourard ら (1958) は、自己開示の程度の個人差を測定するための質問紙 (JSDQ) を考案した。これは自己開示についての実証的研究への有力なる手法として活用され、この分野についての多くの研究が生まれた。

自己開示とパーソナリティの関係についての研究の結果は、必ずしも一貫したものではないが、Jourard (1971) によれば、自己開示傾向の強い人は、どちらかといえば、社会的外向性の傾向があり、神経質徴候は少ない人である。また、自己開示度の高い人は社会的承認欲求が低く (Burhenne & Mirel, 1970), Sousa-Poza & Shulman (1973) は、場面依存型 (場面全体のなかからある特定の部分だけを取り出すことが不得意で、全体的特徴の方に目が向き易く、社会的には外向的な特性をもつ) の人は、自己開示度が高い傾向のあることを示した。さらに、Halverson & Shore (1969) は、自己開示と対人的な柔軟性や一般的な順応性の間には、正の相関関係があることを明らかにした。なお、Mayo (1968) は神経症患者に比較して健常者の自己開示性が高いことを示唆する結果を得た。

しかしながら、もう一方で Duckro, Duckro & Beal (1976) は、自己開示傾向が強い者は不安傾向が大きいことを、また Stanley & Bownes (1966) は、Maudsley Personality Inventory (MPI) の N (神経症的傾向) と自己開示性との間に相関関係のないことを示している。

自己開示性とパーソナリティ特性との間には必ずしも一貫した関係が報告されているわけではないが、自己開示性と社交性および自己開示性と外向性との間には概ね一致して正の相関関係が認められている (Pederson & Breglio, 1968, Pederson & Higbee, 1969, Cozby, 1973, 大坊・岩倉, 1984)。また、神経症的傾向については、自己開示性とは特に関係がないことを示唆する研究例も散見されるが、むしろ神経症的傾向のパーソナリティ特徴からみて、自己開示性を抑制する効果をもつと考えられ、それに沿った結果を示す研究 (Pederson & Higbee, 1969, 遠藤, 1989) もある。

本研究においては、自己開示性と開示者自身のパーソナリティの特徴—とくに、向性と神経質傾向との間の関係を明らかにすることを目的とした。そのため、「外向性—内向性」と「神経症的傾向」を測ることを目的とした性格検査である日本版モーズレイ性格検査 (MPI) に着目した。『新・性格検査法—モーズレイ性格検査』(1969) およびその検査手引 (1964) によれば、「外向性性格とは、社交的・開放的で動作や感情の表現にためらいのない傾向のことをいい、いわゆる人づきあいのよい陽気な性格をあらわし、ときのはずみで行動する衝動的な特徴を示

す。それと反対に引っ込み思案で人とのつきあいを避けるような特徴を内向性という。内向性の人は落ち着いていて、内省的で秩序だった生活様式を好む。」また、「神経症的傾向は、情動（感情・情緒）の過敏性を示す傾向であって、わずかなストレスに対しても容易に神経症的混乱をひき起こすような人にみられる性格特徴であり、いわゆる神経質で落ちつきのない、いつでも緊張している人がらと印象づけられる、情緒不安定な性格特徴を示す。」と2つの性格特性の特徴を述べている。

そこで、自己開示性との関係からみれば、次のような仮説がたてられるであろう。外向性－内向性性格（E 特性）は自己開示を促進する（高める）要因として機能すると考えられる。そして、その高める度合いは外向性（E）においてはより強く、内向性（e）においてはより弱く働くと考えられる。すなわち、自己開示を高める観点から E と e の間には $E > e$ の関係が存在するとみられる（仮説 1）。また、神経症的傾向（N 特性）は自己開示を抑制する（低める）要因として働くであろう。そして、その抑制する度合いは高い神経症的傾向（N）においてはより強く、低い神経症的傾向（n）においてはより弱く働くと考えられる。すなわち、自己開示を低める観点から、N と n の間には $N > n$ の関係が考えられる。しかし、この関係は E 特性と同じ立場から考慮される必要があるので、自己開示に働く力を E 特性と同じ方向で捉えるならば、自己開示を高める観点から、 $n > N$ の関係が成立すると考えられる（仮説 2）。また、自己開示度を高めようとする E 効果とそれを抑制しようとする N 効果は、次に述べる EN 群では強く、en 群では弱く働くと予想され、これら2つの群においては E・N 両効果は相殺しあって、両群の自己開示度はほぼ等しくなると考えられる。したがって、MPI における E・N の2特性の特徴から構成される4群（EN, En, eN, en）の自己開示度の相互関係は、 $En > EN \approx en > eN$ となることが予想される（仮説 3）。

方 法

上述の問題および目的にそって、自己開示性と向性・神経症的傾向の相互関連性を検討するため、自己開示性の測定とパーソナリティの測定（モーズレイ性格検査）を行った。調査対象者は、O 大学、K 大学、W 大学の学生で、その数は391名（男子268、女子123）である。

1. 自己開示性の測定

日常生活における自己開示傾向を測定した従来の諸研究をふまえ、JSDQ-60（Jourard Self Disclosure Questionnaire 60項目版）をもとに、わが国で行われた先行研究をも参考として、予備調査により項目の選択を行い、自己開示質問紙を作成した。開示領域は、態度、身体、学校生活、性格、興味、金銭の6種類とし、各領域に6項目ずつ、計36項目で構成される質問紙を作成した。

開示対象者（標的人物）として、父、母、兄・姉、弟・妹、同性の友人、異性の友人、先輩そして後輩の8種の人物を設定し、その回答方法は、被験者に対して開示対象者ごとに自分自身を打ちあける程度を、「何も話さない」場合は0を、「それほど深く話さない」場合は1を、「くわしく打ちあけて話す」場合には2を、そして本音を隠して「嘘をついたり、不正確に述べ

たりする」場合には×印を、記入するよう求めた。

2. パーソナリティ特徴の測定

パーソナリティ特徴の一測度として、モーズレイ性格検査 (MPI 研究会, 1964) による、外向性-内向性尺度 (E 尺度) と神経症的傾向尺度 (N 尺度) を用いた。モーズレイ性格検査の指示にしたがい、E・N 両尺度の？の回答数が20以上の者と、虚偽性 (L 尺度) 得点20以上の者を、信頼度に疑問が残る理由で被験者群から除外した。除外した被調査者数は50であった。

研究目的に対応して、E および N 尺度得点の段階点 1・2 を低得点者群、4・5 を高得点者群とし、それらの組み合わせによって、高 E 高 N 群 (EN 群)、高 E 低 N 群 (En 群)、低 E 高 N 群 (eN 群)、低 E 低 N 群 (en 群) の 4 群を設定した。したがって、EN 群は「外向的で、神経症的傾向が高い」群、En 群は「外向的で、神経症的傾向が低い」群、eN 群は「内向的で、神経症的傾向が高い」群、そして en 群は「内向的で、神経症的傾向が低い」群を指している。

以上のような手続きを経て、設定された 4 群の被験者数と E 尺度・N 尺度得点の段階点は、TABLE 1 に示すとおりである。

なお、調査実施期日は、1991年 6 月 8～25日であった。

結 果

自己開示性検査の各質問項目に対する開示対象者ごとの回答を、自己開示性の指標として用いた。すなわち、防衛的回答 (×) を除外して、「何も話さない」場合は 0 点、「それほど深く話さない」場合は 1 点、「くわしく打ちあけて話す」場合は 2 点として数値化した。それを領域別に集計して開示対象者数で除して得た数値をもって、その個人の各領域における自己開示得点とした。したがって、個人がとりうる領域別最高可能得点は12、最低可能得点は 0 である。

自己開示性検査の信頼度係数の測定は、折半法を用いて、スピアマン・ブラウンの公式により算出した。その値は全被験者 (180名) では0.856、EN 群で0.858、En 群で0.822、eN 群で0.776、en 群で0.921であった。また領域別では、0.920 (興味) から0.792 (身体) までの範囲であり、ここで用いた開示尺度の信頼性は十分高いレベルにあるといえることができる。

モーズレイ性格検査の E・N 両尺度の群別平均得点 (および標準偏差) については、EN 群の E 得点は39.19 (4.12)、N 得点は34.60 (4.94) で、En 群の E 得点は40.32 (4.83)、N 得点は11.62 (4.48) で、eN 群の E 得点は15.81 (4.49)、N 得点は35.88 (4.90) であり、en 群の E 得点は15.46 (5.87)、N 得点は16.33 (4.33) であった。

性別にみると、eN 群の E 得点 (男<女, $t=2.043$, $p<.05$) を除いて、E・N 両得点に関す

TABLE 1 4 群の被験者数と段階点

群	被験者数(男・女)	E 段階点	N 段階点
高 E 高 N (EN)	48 (17・31)	4, 5	4, 5
高 E 低 N (En)	65 (33・32)	4, 5	1, 2
低 E 高 N (eN)	43 (22・21)	1, 2	4, 5
低 E 低 N (en)	24 (10・14)	1, 2	1, 2
計	180 (82・98)		

る各群の男女間に統計的な有意差はみられない。

1. 自己開示得点

領域全体（全領域）に対する全被験者の自己開示得点は5.22（男子5.04，女子5.36）で，女子の方が男子より自己開示がやや高い傾向であるが，この得点は調査票の回答基準「それほど深く話さない」をやや下まわること示している。

要因 A（群）と要因 B（領域）の 2 要因に関する分散分析を行った結果，TABLE 2 に示すとおり，要因 A と要因 B の主効果にはいずれも 1%水準で有意差がみられた。しかし要因 A・B の交互作用は有意でなかった。すなわち，自己開示は 4 群の特性によってそれぞれその開示度に差異がみられ，また，6 つの領域の違いによっても自己開示度が異なる。

FIG.1 は，全被験者および男女別についての自己開示得点を，領域別にプロットしたもので

TABLE 2 分散分析表

Source	SS	df	MS	F ₀
要因A(群)	323.745	3	107.914	25.908**
要因B(領域)	583.065	5	116.613	27.997**
交互作用(A×B)	24.838	15	1.656	0.398
誤差(e)	4398.504	1056	4.165	

5330.149 1079

**p<.01

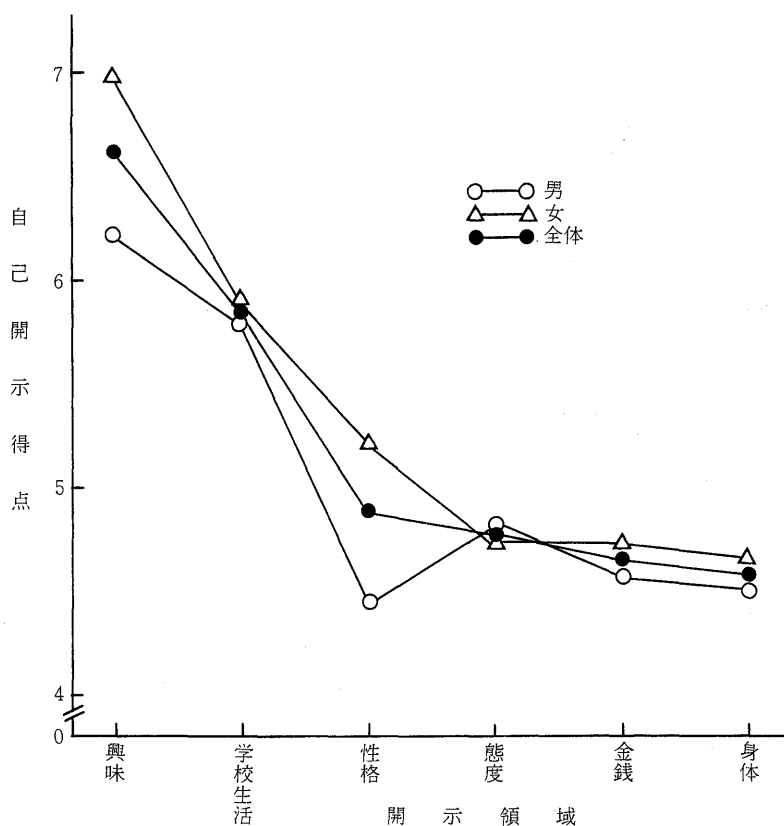


FIG. 1 領域別自己開示得点

TABLE 3 自己開示得点の領域間差のt検定(全群)

領 域	身 体	学校生活	性 格	興 味	金 銭
態 度	0.879	4.901**	0.502	8.035**	0.499
身 体		5.937**	1.412	9.111**	0.375
学校生活			4.481**	3.333**	5.460**
性 格				7.675**	1.016
興 味					8.603**

** $p < .01$

ある。全体として、開示得点は「興味」(6.62)が最高で、「学校生活」(5.85)がこれにつき、他の4領域に比して有意に高い得点が示されている。そしてTABLE 3に示すように、「興味」・「学校生活」と他の領域の開示得点相互間には、すべて1%水準で有意差が認められた。また、「性格」「態度」「金銭」および「身体」の開示得点は同程度で低く(4.87~4.57)、これら4領域における開示得点相互の間には、有意差は認められなかった。

これら領域別における自己開示得点の傾向は、大坊・岩倉(1984)の結果と一致しており、「興味」とか「学校生活」のような比較的表面的なテーマについての自己開示は行われ易く、個人の内面に深くかかわるような側面は開示されにくいことを示唆するものであった。

男女別にみると、領域全体においては性差は認められなかったが、「興味」と「性格」の2領域においては有意差が認められ、女子の方が有意に高い開示得点を示した(興味: $t=2.226$, $p<.05$, 性格: $t=2.569$, $p<.01$)。

2. 群別自己開示得点

1) 群内の比較分析

(1) EN群について

TABLE 4に示すように、EN群被験者の自己開示得点は5.18であり、4群のなかではEn群について高いが、全被験者(180名)の自己開示得点(5.22)との間に有意差はみられず、ほぼ同じレベルの開示度を示している。

性別では、男子の自己開示得点は4.57で、女子の5.52に比べて有意に低い開示度を示している($t=3.065$, $p<.01$)。

自己開示度を領域相互間について比較したところ、得点の高い順に、「興味」「学校生活」「性格」「態度」「金銭」「身体」と並び(TABLE 4参照)、そして、「興味」と「態度」($t=3.008$)、「興味」と「身体」($t=3.725$)および「興味」と「金銭」($t=3.270$)の3領域間において1%水準で、また「学校生活」と「身体」($t=2.098$)および「興味」と「性格」($t=1.967$)の2領域間においては5%水準で有意差が認められた。

また、領域別に男女の自己開示得点を比較してみると、「学校生活」を除いた他の5領域では男子が女子を下まわる開示度を示し、「興味」($t=3.260$, $p<.01$)、「性格」($t=2.105$, $p<.05$)および「身体」($t=2.282$, $p<.05$)の3領域で、統計的な有意差が認められた。「学校生活」に関する男女それぞれの自己開示得点は、他の領域と異なって男女が逆転する数値を示している

TABLE 4 自己開示得点 (群別・領域別・性別)

			態度	身体	学校生活	性格	興味	金銭	全領域
E N 群	男(17)	M(SD)	4.28(2.19)	3.75(1.96)	5.91(2.27)	4.34(2.42)	4.82(2.22)	4.30(1.91)	4.57(2.27)
	女(31)	M(SD)	5.08(2.18)	5.02(1.71)	5.22(1.80)	5.84(2.25)	7.04(2.20)	4.94(2.19)	5.52(2.19)
	計(48)	M(SD)	4.80(2.21)	4.57(1.90)	5.47(2.11)	5.30(2.23)	6.25(2.43)	4.71(2.10)	5.18(2.27)
E n 群	男(33)	M(SD)	5.62(2.19)	5.46(2.06)	6.62(2.58)	5.28(1.93)	7.36(2.29)	5.36(2.09)	5.95(2.33)
	女(32)	M(SD)	5.14(1.99)	5.02(1.84)	6.88(1.53)	5.31(1.70)	7.77(1.73)	4.93(2.28)	5.84(2.16)
	計(65)	M(SD)	5.39(2.12)	5.25(1.95)	6.75(2.12)	5.30(1.84)	7.56(2.03)	5.15(2.19)	5.90(2.24)
e N 群	男(22)	M(SD)	4.23(1.74)	3.55(1.66)	4.67(1.51)	3.70(1.40)	5.69(1.91)	3.86(1.43)	4.28(1.75)
	女(21)	M(SD)	3.62(1.21)	3.36(0.93)	4.98(1.54)	4.05(1.42)	5.68(1.84)	3.79(1.34)	4.25(1.50)
	計(43)	M(SD)	3.93(1.65)	3.45(1.32)	4.82(1.54)	3.87(1.40)	5.68(1.83)	3.82(1.35)	4.26(1.64)
e n 群	男(10)	M(SD)	4.03(2.11)	4.52(2.79)	5.39(2.30)	3.46(2.14)	5.95(2.76)	3.89(2.36)	4.54(2.46)
	女(14)	M(SD)	4.74(2.61)	4.87(2.06)	6.41(2.20)	5.41(2.19)	6.86(2.05)	5.15(2.15)	5.57(2.36)
	計(24)	M(SD)	4.44(2.39)	4.72(2.30)	5.99(2.32)	4.60(2.40)	6.47(2.33)	4.62(2.41)	5.14(2.42)
全 群	男(82)	M(SD)	4.78(2.15)	4.48(2.19)	5.80(2.36)	4.44(2.07)	6.21(2.43)	4.56(2.02)	5.04(2.33)
	女(98)	M(SD)	4.74(2.08)	4.64(1.81)	5.88(1.84)	5.22(1.98)	6.96(2.06)	4.72(2.10)	5.36(2.15)
	計(180)	M(SD)	4.76(2.11)	4.57(1.98)	5.85(2.10)	4.87(2.04)	6.62(2.27)	4.65(2.06)	5.22(2.22)

るが、男女間に有意差は認められなかった。

(2) En 群について

En 群被験者の自己開示得点は5.90で、TABLE 4 に示すとおり、4 群中で最も高く、全被験者の開示得点 (5.22) よりかなり高く、両者の間に有意差がみられた ($t=2.103$, $p<.05$)。

領域相互間の自己開示得点を比較した結果によると、全被験者の傾向と同じく、「興味」と「学校生活」の得点が高かった。他の4領域の得点に比して著しく高く、「態度」「性格」「身体」「金銭」の4領域はほぼ同得点である (TABLE 4 参照)。そして「学校生活」と「態度」($t=3.511$)、「学校生活」と「身体」($t=4.155$)、「学校生活」と「性格」($t=4.148$) および「学校生活」と「金銭」($t=4.188$) の間にはすべて1%水準で、また「興味」と「態度」($t=5.881$)、「興味」と「身体」($t=6.544$)、「興味」と「性格」($t=6.589$) および「興味」と「金銭」($t=6.427$) の間にもすべて1%水準で、さらに「学校生活」と「興味」($t=2.201$) の間では5%水準で、それぞれ統計的に有意差が認められた。

性別でみると、領域全体の自己開示得点は、男子が5.92で、女子が5.84であり、両者の開示度は同一レベルにあるといえる。また、6領域すべてにおいて有意な性差は認められなかった。なお、女子の「興味」に関する自己開示得点 (7.77) は、男女6領域中、最高の自己開示量である。

(3) eN 群について

TABLE 4 に示すように、eN 群被験者の自己開示得点は4.26で、全被験者の開示得点 (5.22) を著しく下まわり、両者間に有意差が認められた ($t=2.955$, $p<.01$)。

領域相互間の自己開示得点を比較すると、「興味」と「学校生活」に関する得点、特に「興味」の得点が高く、これに比して他の4領域はほぼ同水準の低い得点を示している (TABLE 4 参

照)。また、「興味」と「態度」($t=4.450$)・「身体」($t=6.390$)・「性格」($t=5.070$)・「金銭」($t=5.254$)の4領域との間では1%水準で、また「学校生活」と「身体」($t=4.349$)・「金銭」($t=3.145$)の2領域との間でも1%水準で、そして「学校生活」と「興味」($t=2.318$)・「態度」($t=2.386$)・「性格」($t=2.474$)の3領域との間では5%水準で、それぞれ有意差がみられる。

男女の開示得点については、有意な性差は存在せず、どの領域においても開示得点の有意な男女差は認められなかった。なお、「身体」に関する自己開示得点(3.36)は、男女6領域中、最低の自己開示量である。

(4) en 群について

TABLE 4 に示すとおり、en 群被験者の自己開示得点は5.14で、全被験者の開示得点(5.22)との間に有意差はなく、両者の開示度は同一レベルにあるといえる。

自己開示得点を領域相互間について比較してみると、「興味」「学校生活」の得点が他の4領域の得点より高く、「身体」「金銭」「性格」「態度」はほぼ同程度の自己開示量である(TABLE 4 参照)。「興味」・「学校生活」と他領域との間に、すなわち「興味」-「態度」($t=2.903$)、「興味」-「性格」($t=2.738$)、「興味」-「金銭」($t=2.701$)で1%水準の有意差が、また「興味」-「身体」($t=2.586$)、「学校生活」-「態度」($t=2.194$)、「学校生活」-「性格」($t=2.024$)、「学校生活」-「金銭」($t=1.991$)で5%水準の有意差が存在する。さらに性別にみると、領域全体においては統計的有意差が認められた($t=2.381$, $p<.05$)が、領域別にみると、「性格」を除いた他の領域においては、有意差は認められなかった(性格: $t=2.071$, $p<.05$)。なお、男子の「性格」に関する得点(3.46)は、男女6領域中、最低の自己開示量に匹敵する低い得点である。

2) 群間の比較分析

(1) 領域全体について

4群の自己開示得点とその男女別得点は、TABLE 4 に示すとおりであり、4群のなかでは、En 群の開示得点(5.90)が最も高く、EN 群(5.18)とen 群(5.14)が同程度の開示度でこれにつぎ、eN 群が最も低い開示得点(4.26)を示している。

また、群間の自己開示得点をt検定によって検討した結果は、TABLE 5 に示すように、EN-en の群間を除いた他のすべての群相互間において、1%の水準で有意差が認められた。

(2) 領域別の比較

① 「態度」について

「態度」に対する自己開示度は、En 群(5.39)が最も高く、EN 群(4.80)とen 群(4.40)

TABLE 5 自己開示得点の群間差のt検定(全領域)

	En 群	eN 群	en 群
EN 群	4.114**	5.467**	0.169
En 群		10.746**	3.404**
eN 群			3.893**

** $p<.01$

がほぼ同一のレベルでこれにつき、eN 群 (3.93) が最も低い。

各群の自己開示得点を相互に比較してみると、En-eN 群間では、群全体 ($t=3.782$, $p<.01$), 男子 ($t=2.452$, $p<.05$), 女子 ($t=3.079$, $p<.01$) で、また EN-eN 群間では、群全体 ($t=2.085$, $p<.05$), 女子 ($t=2.737$, $p<.01$) で、そして En-EN 群間では男子 ($t=2.008$, $p<.05$) のみで、それぞれ統計的に有意差が認められた。

②「身体」について

「身体」における自己開示度は、En 群 (5.25) が最も高く、en 群 (4.72) と EN 群 (4.57) がほぼ同じ程度の開示度でこれにつき、eN 群 (3.45) が最も低い。

群間を相互に比較してみると、En-eN 群間においては、群全体 ($t=5.256$) ・男子 ($t=3.566$) ・女子 ($t=3.752$) いずれも 1%水準で、EN-eN 群間においては、群全体 ($t=3.191$, $p<.01$) と女子 ($t=3.981$, $p<.01$) で、en-eN 群間では、群全体 ($t=2.486$, $p<.05$) と女子 ($t=2.855$, $p<.01$) で、En-EN 群間では男子 ($t=2.769$, $p<.01$) のみで、それぞれ有意差が認められた。

③「学校生活」について

「学校生活」における自己開示度は、En 群 (6.75) が最も高く、en 群 (5.99) と EN 群 (5.47) がこれにつき、eN 群 (4.82) が最も低い。

群間を相互に比較すると、En-eN 群間では群全体 ($t=5.110$) ・男子 ($t=3.140$) ・女子 ($t=4.326$) すべてに 1%水準で、En-EN 群間では群全体 ($t=3.110$) と女子 ($t=3.886$) とともに 1%水準で、en-eN 群間では群全体 ($t=2.412$) と女子 ($t=2.196$) とともに 5%水準で、それぞれ有意差が認められた。

④「性格」について

「性格」に対する自己開示度は、En 群と EN 群が同一の開示度 (5.30) で最も高く、en 群 (4.60) がこれにつき、eN 群 (3.87) が最も低い。

群間を相互に比較すると、En-eN 群間では群全体 ($t=4.296$) ・男子 ($t=3.243$) ・女子 ($t=2.759$) いずれも 1%水準で、EN-eN 群間では群全体 ($t=3.494$) と女子 ($t=3.172$) とともに 1%水準で、En-en 群間では男子 ($t=2.485$) のみ 5%水準で、en-eN 群間では女子 ($t=2.164$) のみ 5%水準で、それぞれ有意差が認められた。

⑤「興味」について

「興味」の場合は、En 群 (7.56) の自己開示度が最も高く、en 群 (6.47) と EN 群 (6.25) が同じ程度でこれにつき、eN 群 (5.68) が最も低い。

群間を相互に比較すると、En-eN 群間では群全体 ($t=4.833$) ・男子 ($t=2.776$) ・女子 ($t=4.113$) いずれも 1%水準で、En-EN 群間では群全体 ($t=3.047$) と男子 ($t=3.753$) とともに 1%水準で、En-en 群間では群全体 ($t=2.133$) のみ 5%水準で、EN-eN 群間では女子 ($t=2.288$) のみ 5%水準で、それぞれ有意差がみられた。

⑥「金銭」について

「金銭」の場合には、自己開示度は En 群 (5.15) が最も高く、EN 群 (4.71) と en 群 (4.62)

がほぼ同一の開示度でこれにつき、eN 群 (3.82) が最も低い。

群間を相互に比較すると、En-eN 群間では群全体 ($t=3.509$) と男子 ($t=2.885$) とともに 1% 水準で、女子 ($t=2.029$) が 5% 水準で、EN-eN 群間では群全体 ($t=2.348$) と女子 ($t=2.107$) とともに 5% 水準で、en-eN 群間では女子 ($t=2.238$) のみ 5% 水準で、それぞれ統計的有意差が認められた。

以上を総括してみると、どの領域においても、自己開示度は En 群が最も高く（ただし「性格」では En=EN）、eN 群が最も低い。その中間に EN 群と en 群がほぼ同一のレベルで位置づけられる。したがって、「性格」における En 群と EN 群を除いて、5 領域における自己開示度は 4 群相互間に、 $En > EN \approx en > eN$ の傾向のあることが見出された。

考 察

自己開示行動とは、自分自身についての私的情報を他者へ伝達する行為であり、すでに述べたように、パーソナリティ特性と密接に関係していると考えられる。

自己開示性が開示者自身の向性・神経症的傾向とどのように関係しているかを検討するため、MPI の結果に基づいて構成された EN 群、En 群、eN 群および en 群の 4 群相互間において、領域全体に対する被験者の自己開示度を比較した。

まず、E 特性についての自己開示度は、われわれが設定した仮説 1 によれば、 $E > e$ の関係があると考えられる。この関係を確かめるためには、En-en と EN-eN の 2 組の群間において、前者は n が共通し、後者は N が共通となるので、両者の自己開示度を比較すればよい。同様に、仮説 2 から N 特性については $n > N$ の開示関係がみられるだろう。この関係は、En-EN と en-eN の 2 組の群間の自己開示度を比較することによって明らかになる。

TABLE 5 は、領域全体について 4 群相互間における自己開示度の有意差検定の結果をまとめたものである。この表から明らかなように、En-en と EN-eN の 2 組の群間それぞれに統計的有意差が認められることから、 $E > e$ の自己開示関係を主張することができる。同様に、同表から En-EN と en-eN の 2 組の群間に有意差が認められ、 $n > N$ の自己開示関係の存在を指摘することができる。また性別に分析すると、男子の場合、En-en ($t=4.053$, $p<.01$) と En-EN ($t=4.902$, $p<.01$) の 2 組の群間には有意差が認められるが、EN-eN と en-eN の 2 組の群間には有意差は認められないものの、自己開示得点の比較では $EN > eN$, $en > eN$ の傾向がみられる (TABLE 4 参照) ことから、 $E > e$, $n > N$ の関係があることを指摘することができよう。女子の場合、EN-eN ($t=6.079$, $p<.01$) と en-eN ($t=4.550$, $p<.01$) の群間には有意差が認められるが、En-en と En-EN 群間には有意差はみられないものの、自己開示得点の比較では $En > en$, $En > EN$ の傾向がみられる (TABLE 4 参照) ことから、同様に、 $E > e$, $n > N$ の関係を指摘することができよう。

以上のような考察から、自己開示性について、E 特性は自己開示を高める（促進する）要因として働く（E 効果）ものとみられ、E はより強く、e はより弱く作用すると考えられる。また、N 特性は自己開示を低める（抑制する）効果をもつ（N 効果）ものとみることができ、N はよ

り強く、n はより弱く働くものと考えられる。

次に、各開示領域について E 効果と N 効果を上述した方法にしたがって検討する。E 効果に関して自己開示度を En-en 群間で比較してみると、「興味」だけに統計的有意差が認められた。他の 5 領域では開示度に有意差は認められなかったが、いずれの領域においても開示得点について $En > en$ の傾向がみられた。また、EN-eN 群間では「態度」「身体」「性格」および「金銭」において有意差が認められた。「学校生活」と「興味」では有意差は認められなかったが、いずれの領域においても開示得点に関して $EN > eN$ の傾向がみられた。

領域によっては En-en 群間および EN-eN 群間において、自己開示度に統計的有意差が認められないところもあったが、すべての領域において、自己開示得点は E 効果にそった傾向のあることが示唆された。

さらに、N 効果を検討するために、自己開示度を En-EN 群間で比較した結果によると、「学校生活」と「興味」の 2 領域において、EN 群に比して、En 群は有意に高い開示度を示した。他の 4 領域においては、有意差は認められなかったが、どの領域においても共通して開示得点について $En > EN$ の傾向が認められた。

また、en-eN 群間においては「身体」と「学校生活」の 2 領域のみに有意差が認められ、開示度について $en > eN$ の関係がみられた。他の 4 領域の開示度について en-eN 群間に統計的な有意差は認められなかったものの、開示得点に関してはいずれの領域においても $en > eN$ の傾向がみられた。

上記のように、自己開示得点に関して $En > EN$ および $en > eN$ という傾向がみられたことは、N 特性が自己開示を抑制する効果をもつことを示唆するものである。

なお、各領域別の自己開示度を、E 効果が最も強く働くと考えられる En 群と N 効果が最も強く働くとみられる eN 群の間において比較検討した結果によると、どの領域においても 1% 水準で有意差が認められ、一貫して $En > eN$ の関係のあることが確証された（態度： $t=3.782$ ，身体： $t=5.217$ ，学校生活： $t=5.110$ ，性格： $t=4.296$ ，興味： $t=4.833$ ，金銭： $t=3.509$ ）。

また、領域別の自己開示度を En-eN 群間で比較すると、いずれの領域においても 1% 水準で有意差が認められた。そして性別でも、男子では「態度」は 5% 水準で、他の 5 領域は 1% 水準で、女子では「金銭」は 5% 水準で、他の 5 領域は 1% 水準で統計的有意差が認められた。したがって、領域別、男女別にも $En > eN$ の関係の存在することが立証された。

上述の結果に加えて、4 群相互間において、領域全体に対する自己開示度を比較考察した。それは TABLE 5 および FIG.2 に示すように、EN-en 群間を除く他のすべての群間において開示度に統計的有意差が認められ、自己開示度に関して $En > EN = en > eN$ という関係を示すものであった（仮説 3）。すなわち、自己開示度は外向的で神経症的傾向が低い En 群において最も高く、外向的で神経症的傾向が高い EN 群と内向的で神経症的傾向が低い en 群が、ほぼ同じレベルの開示度でこれにつぎ、内向的で神経症的傾向の高い eN 群が最も低い自己開示度を示している。また EN 群の場合は、自己開示度を高めようとする E 効果とそれを抑制しようとする N 効果が相殺しあって、これら 2 つの効果が弱いと判断される en 群と同じ程度の自己

開示度を示したものと考えられる。

以上の比較検討から、われわれの設定した外向性-内向性性格（E 特性）は自己開示を高める要因として機能するとした仮説 1、また神経症的傾向（N 特性）は自己開示を抑制する要因として働くとした仮説 2、そして EN 群、En 群、eN 群と en 群の自己開示度の相互関係は、 $En > EN = en > eN$ となるとした仮説 3 はそれぞれ検証されたと考える。

なお、仮説 1・仮説 2 の検証に際して、一つのアプローチとして、自己開示度と向性および神経症的傾向との相関的研究法も考えられ、それに基づいて相関係数を算出したが、いずれも低い数値しか得られなかった。それは、主として次のような事情によるものと考えられる。

本研究で設定した群は、先に述べたように、MPI の E・N 尺度得点の段階点 1・2 および 4・5 にもとづいて構成されたものである。したがって、高 E 群における E 得点の範囲は 32～48 で、低 E 群ではその範囲は 0～20 である。また、N 得点の範囲は高 N 群では 29～48 で、低 N 群においては 0～20 である。このように、各群における E および N 得点の幅は 16 から 20 とかなり

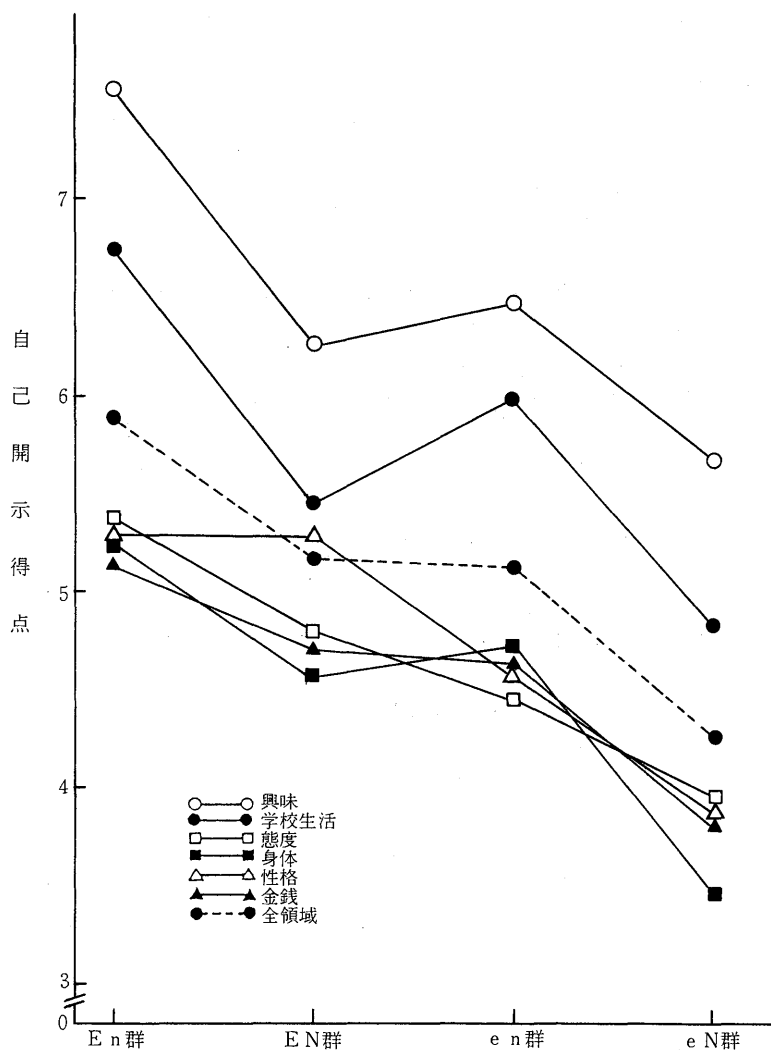


FIG. 2 群別自己開示得点

大きい、このことが自己開示度と E および N 得点との間に低い相関係数しか得られなかったことと関連していると考えられる。すなわち、自己開示度と E 特性との相関には N 特性も関与し、また自己開示度と N 特性との相関には E 特性の影響を無視することはできない。同時に、それら得点の範囲が大きいことは、その影響の度合いもまた大きく、それも相関関係を低くする一因になっていると思われる。

本研究では、専ら開示者自身のパーソナリティ特徴をとりあげたが、そもそも自己開示行動は開示者と開示対象者との関係を通じて展開されるものである。したがって、今後の研究においては、自己開示者とその対象者との対人関係という視点から、自己開示性とパーソナリティ特徴の力動的関係の解明に焦点をあてようと考えている。

引用文献

- Burhenne, D. & Mirel, H.L. 1970 Self-disclosure in self-descriptive essays. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 35, 409-413.
- Cozby, P.C. 1973 Self-disclosure: A Literature Review. *Psychological Bulletin* 79, 73-91.
- Duckro, R., Duckro, P. & Beal, D. 1976 Relationship of self-disclosure and mental health in black-females. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 44, 940-944.
- 遠藤公久 1989 開示状況における開示意向と開示規範からのズレについて—性格特徴との関連—*教育心理学研究*, 37, 1, 20-28.
- Eysenck, H.J.: *Manual of Maudsley Personality Inventory*. London: University London Press, 1959.
- Eysenck, H.J. 著 MPI研究会訳編 1964 日本版モーズレイ性格検査手引, 誠信書房.
- Halverson, C.F. Jr. and Shore, R.E. 1969 Self-disclosure and interpersonal functioning. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 33, 213-217.
- Jourard, S.M. & Lasakow, P. 1958 Some factors in self-disclosure. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 56, 91-98.
- Jourard, S.M. 1971 *Self-disclosure: An experimental analysis of the transparent self*. N.Y.: Wiley-Interscience.
- Mayo, P.R. 1968 Self-disclosure and neurosis. *British Journal of Social and Clinical Psychology*, 7, 252-257.
- MPI研究会編 1969 新・性格検査法—モーズレイ性格検査—誠信書房, 139-143.
- 大坊郁夫・岩倉加枝 1984 自己開示におけるパーソナリティと状況要因の役割 山形大学紀要(教育科学), 8, 3, 101-127.
- Pederson, D.M. & Breglio, V.J. 1968 Personality correlates of actual self-disclosure. *Psychological Reports*, 22, 495-501.
- Pederson, D.M. & Higbee, K.L. 1969 Personality correlates of self-disclosure. *Journal of Social Psychology*, 78, 81-89.
- Sousa-Poza, J.F. & Shulman, E. 1973 Field-dependance and self-disclosure. *Perceptual and Motor Skills*, 36, 735-738.
- Stanley, G. & Bownes, A.F. 1966 Self-disclosure and neuroticism. *Psychological Reports*, 18, 350.

(原稿受理 1994年8月9日)